

## 新刊

□ Aleck Yang T. Y. 楊 宗愈: **Type Specimens of Taiwanese Plants Named by Dr. C. J. Maximowicz and Housed at the Herbarium, Komarov Botanical Institute of the Russian Academy of Sciences, St. Petersburg, Russia (LE) Special Publication Number 10** 国立自然科学博物館学術専刊 第10号. 90 pp. 2006. National Museum of Natural Science, Taichung. 国立自然科学博物館, 台中. ISSN: 1015-8391.

マキシモヴィッチ C. J. Maximowicz が記載に用いたタイプ標本はロシア, サンクト・ペテルブルグのコマロフ植物研究所に収蔵されている。本書はそのうち, 台湾産の種のタイプ標本を扱ったカラー写真集で, 維管束植物38種が取り上げられている。写真は楊博士が2001年6月23日から30日にかけて撮影したもので, 印刷も鮮明である。標本全体の写真のほか, 重要な部分の拡大写真やラベル, スケッチの拡大写真も添えられている。台湾産の種といっても, タカネハンショウヅル *Clematis lasianдра* やヤエヤマセンニンソウ *C. tashiroi* など日本と共通するものも多く, 日本の植物相を理解する上でも有用な書物である。このような出版物を計画・出版された楊博士に敬意を表する。入手に関しては楊博士 (E-mail: aleckyan@mail.nmns.edu.tw) に連絡をとっていただきたい。(門田裕一)

□ いがりまさし: **日本の野菊** 278 pp. 12.5 × 20 cm. 2007. ¥2,800. 山と溪谷社. ISBN: 978-4-635-07020-1.

1996年に「日本のスマレ」を刊行した著者が, その後10年を費やした作品だが, 「スタート時点である程度知識のあったスマレと違って, 野菊についてはノコンギクとヨメナの区別がやっとだった」と述懐している。たくさん専門家の助力があったとは言え, 著者のチャレンジ精神は見上げたものだ。吉田外司夫氏のヒマラヤ植物大図鑑もそうだが, いわゆる「専門家」でない人たちが, 昔なら専門家の縄張りを犯すようなことができるのは, 本人の努力が一番だが, それをサポートする「専門家」がたくさんいる世の中になったこ

とを意味するのだろう。卒論の学生にこういう課題を与えたい指導教官がいても, 周囲の先生方に「それがどうした」という態度をとられることは目に見えているから, とてもやれるものではない。

*Chrysanthemum*, *Aster*, *Nipponanthemum*, *Leucanthemelia*, *Matricaria*, *Erigeron* が取り上げられている。目次は頁順ではなく, まず属と節の検索表が示され, 検索チャート, 見分け方コラム, 野菊紀行と, トピックでまとめられている。この他に読み物コラムとして12篇の短文が挿入されているが, いわゆる穴埋め記事とは限らず, 「野菊の学名はなぜ変遷するのか」「亜種と変種と命名規約」「野菊の種とは何か」「野菊と染色体」など, 硬い記事が並んでおり, 著者の勉強ぶりが察せられる。

本文では生態, 全形, 花序のアップ, などのほか, 識別点として重要な総苞の接写が必ず添えられており, 種類によっては花序の断面や小花や果実の形態, ときには葉縁の形や葉形の変異なども, すべてカラー写真で示されている。説明は種類の記述には重点を置かず, 生態や撮影の際の観察記やその種類の研究の現状などが記されている。各節のはじめに種類識別のための検索チャートが示され, ときには分類的に離れているが類似している種類の識別用チャートもある。種類ごとの分布図を伴っており, 著者が実見したもの(赤), 標本で確かめたもの(緑), 文献に出ているもの(黒)と色分けされているが, その赤点がとても多いことが, 著者のフィールドワークぶりを物語っている。識別のむずかしいこの仲間を「野菊」としてまとめた著者の努力を多としたい。(金井弘夫)

□ 林 将之: **樹皮** ハンドブック 80 pp. 2006. ¥1,200+税. 文一総合出版. ISBN: 4-8299-0022-9.

本書は身近に見られる樹木や林業上重要な樹木を中心に, 158種の樹皮をカラー写真を用いて紹介している。成木の樹皮の形状から, 「横・筋」, 「平滑」, 「縦・筋」, 「縦・裂」, 「網・裂」, 「斑・剥」の六つのタイプに分け

て解説しているのは直感的で分かり易い。しかし、「筋」は「条」ではないだろうか？カバノキ属やサクラ属のように分類群で樹皮にまとまりのあるものもあるが、一般的には樹皮のタイプと分類システムとはほとんど関係がない。逆にこの点が樹皮観察の面白さでもあるのだろう。

樹皮一つをとっても、唯一種の樹木が加齢とともにさまざまに姿・形を変えていくことは、フィールドでの樹木観察の経験のある方ならお分かりだろう。本書の特徴の一つは、若木、成木、老木と時間を追って樹皮の変化を示しているところにある。評者もダケカンバやミズメなどの樹皮の移り変わりを本書で再確認した次第である。

著者は樹皮だけで樹木を分類できるのかと問いかけ、同時にこれを否定している。あらかじめ植物相が判明している場所ならいざしらず、樹皮だけで樹木を同定するのはやはり困難で、樹形のほかに花や葉そして冬芽などの特徴と組み合わせることで樹木の特徴を掴むことが望ましい。しかし、樹木が年齢とともに樹皮の様子を変えていくのを眺めていることは興味深いものがある。手元に置いておきたい一冊である。  
(門田裕一)

□小山鐵夫(監)：発見！植物の力 1~10  
48+40+40+40+40 pp. A4. 2006. ¥13,650.;  
40+40+40+40+40 pp. 2007. ¥14,175. 小峰書店.  
ISBN: 4-338-21901-7, 4-338-21902-5, 4-338-21903-3, 4-338-21904-1, 4-338-21905-X;  
978-4-338-21906-8, 978-4-338-21907-5, 978-4-338-21908-2, 978-4-338-21909-9, 978-4-338-21910-5.

ややこしい表記になったが、要するに第一期として1~5分冊、第二期として6~10分冊がまとめて函入りになっている。第1分冊の末尾には全分冊をカバーする植物名と用語の索引があり、また本シリーズ全体についての解説と監修者の標榜する資源植物学について述べられている。分冊の書名は1. 人間と植物。2. 穀物。3. 野菜。4. 布と紙。5. ゴムとウルシ。6. 木と木材。7. 花。8. くだもの。9. お茶・砂糖・油。10. スパイス・ハーブ・薬である。1-3, 9-10は小山氏, 4-8は藤川和美氏が担当している。

本書は函の背文字に「小学校中学年以上」と表示されているように、子供の自由研究のヒントを提供しようと思図したものと思われる。はじめの30頁ほどはイラストと美しいカラー写真を軸に、さまざまなトピックを提供しているが、資源利用の歴史的背景だとか、伝播を示す世界地図だとか、自然保護の問題や生態系についてまで、子ども向けということで質を落とすことなく、数多くの話題が提示されているが、説明文はごく短く、スペース的には写真やイラストが主体である。第2分冊以降のどの分冊も、33頁以降に「指導者・保護者の皆さんへ」と題する詳しい解説が5頁あり、参考文献表まで伴う高度なものである。子供の興味を喚起したうえ、大人がこれらの文献に誘導することを意図したものとも推察される。これに加えて「植物の分類について」と題する1頁が必ずついていて、分冊で扱った植物を例として、その分類上の位置づけが示されている。全体として、従来なかった行き方である。

本書は学校図書館での利用を意図したものと思われるが、内容の有意義さを認めても、現在の教師の忙しさからみて、分冊に示されたような話題を授業で扱うことは、むずかしいのではあるまいか。そういう本を取って購入するには、値段の点で問題があるように思う。単冊での購入も可能なようだが、上質紙使用と図書館用堅牢製本のため、40頁ほどの一冊が2,600円前後だから、子供の本としてはためらう値段ではなかろうか。むしろ博物館や植物園なら、来場者の興味喚起のタネとなり、行事のヒントを拾うのに役立つだろう。教育熱心な家庭むきとも言える。5冊をまとめて収容している蓋つきブックケースは、分冊の背文字を見えなくして、無用と思う。大学の植物教室でも、近頃は植物自体を知らない学生がほとんどだから、こういう本を置いておけば、分類学に限らず、彼らの将来の方向の選択に役立つだろう。(金井弘夫)

□平嶋義宏：生物学名辞典 xii+1292 pp.  
¥4,500+税. 2007. 東京大学出版会. ISBN:  
978-4-13-060215-0.

ユニークな、しかし学名に関する包括的な辞典である。著者は、すでに『学名の話』